

聖丘を望みて

高山しのぶ

いにしへ聖父の睦びし丘
そよふく風もなだらかに
尾崎に咲ける山櫻
散れるを見たまふ。聖父の思ひやも、
あはれ氣高く深かりし。
星も移りて月も亦。變り行くなる春と秋
偲ぶに充てるよしとなり
學びのはやし文の窓
我はたのしくひもときし
思出多きわが机
別れてわれは塵の里
過ぎにし、五とせ、
おゝ沅湘のごときは流れ逝き
返さんすべもならなくに
顧望の巷に低徊し思ひはいと痛まれて
落涙はせきあへず
胸に秘めてたゞ一言
聖父の膝にすがりつき

安からしめよと祈るわれ

編輯の後に

大正十二年は如何に忘れやうとしても忘れる事の
出来ない深い印象を吾人の腦裏に刻み込んだ年であ
つた。そして其の印象は永久に吾人の意識中に把住
せられ常恒に識圖の上下に浮沈して再生せずには居
ない。

五十年以來我國民が熱血を搾り東西文明の粹を集
めて建設した華やかな帝都、それが一朝一夕にして
往昔の武藏野に歸らうとは吾人の想像だも許さぬ所
で有つた、吾人々類に取つて是程の無常是程の凄慘
が復とあらうか。昨日迄畫を欺く銀座の街頭に文明
の酒を漁りつつ戯れ廻つてゐた人々が、今日は鳥一
つだも飛ばぬ廢墟に親子兄弟の白骨を踏みしめなが
ら悲嘆の涙に日を送らねばならぬ身の上となつた、
人生に取つて是程の悲痛是程の酸鼻が復と有らう
か。薄紙一枚を距てた外、現在の瞬間を隔てた後は全
く闇黒の世界として永久に不可知界である淺ましい
人間、それが、どうして大自然に對抗し大自然を制服